

越佐 歴史漫筆 ～ 往ったり来たり ～

2

鉢植え大名

新潟市歴史博物館(みなとぴあ) 館長 伊東 祐之



PROFILE

伊東 祐之 (いとう すけゆき)

1952年長野県の生まれ。新潟市で育ち、新潟大学人文学部・東北大学大学院で日本史を学び、『新潟県史』『山古志村史』など自治体史の編さんに参加する。江戸時代から近代の新潟県域の民衆社会を主に研究する。1987年から新潟市に勤務し、新潟市史の編集にたずさわる。2001年から新潟市歴史博物館みなとぴあの開設準備に加わり、2004年3月の開館後も新潟市歴史博物館に勤務する。2018年から館長を務める。

■ 歴史小説の「ウソ」

歴史の仕事をしていると損だなと思うことがある。いわゆる歴史小説や歴史ドラマを楽しめないのだ。頭の中で、あるいは口に出して、「ウソだ」と言ってしまう。もっとも、これは私の性格の問題かもしれないが。歴史小説について、多くの人が「」に入ったセリフはその通り当時の人が言ったとは思ってはいないだろう。だが、地の文で説明的に書かれていることは本当だと思ってしまう。でもそれは作者が言いたいことを言うために創った物語に、真実味を与え、架空の人物や出来事を本当らしくするための説明であることも多い。

歴史小説は、戦前は「実録物」と呼ばれ、史実の登場人物や背景の出来事を用いて、架空の楽しい、面白いことを書くために作られた話で、軍談や講談、浪曲を筆記したり、新聞に連載したりすることから始まった。「実録」だから本当の事を記録したものと考えるのは大きな間違いである。

書いたことが本当のことと思われている筆頭の小説家が司馬遼太郎である。彼は歴史研究者ではない。彼は歴史書を著述しているのではなく、小説を書いているのである。例えば『峠』には、戊辰戦争時に江戸から蒸気船で帰ってきた河井継之助が、新潟から長岡へ向かうシーンがある。記述によれば、河井は信濃川沿いに歩いて三条を目指す、日が暮れて夕

霞にけむってみえた村上藩領の白根町で泊まり、宿に老婆を集めて越後の盆踊りを楽しむ。お気付きだと思ふ。白根は新発田藩領であり、信濃川岸ではなく中之口川岸の町である。事実としては、このとき河井は新潟から長岡藩の曾根代官所に寄っている。信濃川沿いに長岡に向かったのではなく、西川沿いの道を進んだ。私は司馬の間違いを指摘して喜んでいるわけではなく、司馬の記述を本当だと思ひ、河井は白根に泊まったと喧伝する人がいるのが困るのだ。

■ 「藩」

テレビドラマの時代考証でも、もう仕方ないことになっているのか、時代劇で幕閣などが「○○藩」など言っている。私も「村上藩領」とか「新発田藩領」とか書いた。「藩」は現在歴史用語として定着している。しかし、江戸時代に幕府が公的に「藩」を使ったことはない。「藩」という字の意味はもともと垣根のことで、中国で皇帝を守る諸侯のことを

「藩屏」「藩鎮」などと言った。それを江戸時代の儒者が大名のことを「藩」と気取って使いはじめ、私的に大名領あるいはその組織を〇〇藩などという言い方ができた。だから幕末の浪人が長藩とか会藩とか言うことはある。しかし、将軍や幕府の役人が公けに〇〇藩と言うことはなかった。幕府は1万石以上の大名領は「領」、1万石未満の旗本領は「知行所」と呼んでいた。この「藩」が正式名称になるのは新政府が明治元（1868）年閏四月に新政府の直轄地を「府」「県」としたときに、大名領を「藩」としたのが最初である。そして現在、歴史用語としては1万石以上の大名の統治機構あるいはその領地を「藩」と呼ぶことになっている。

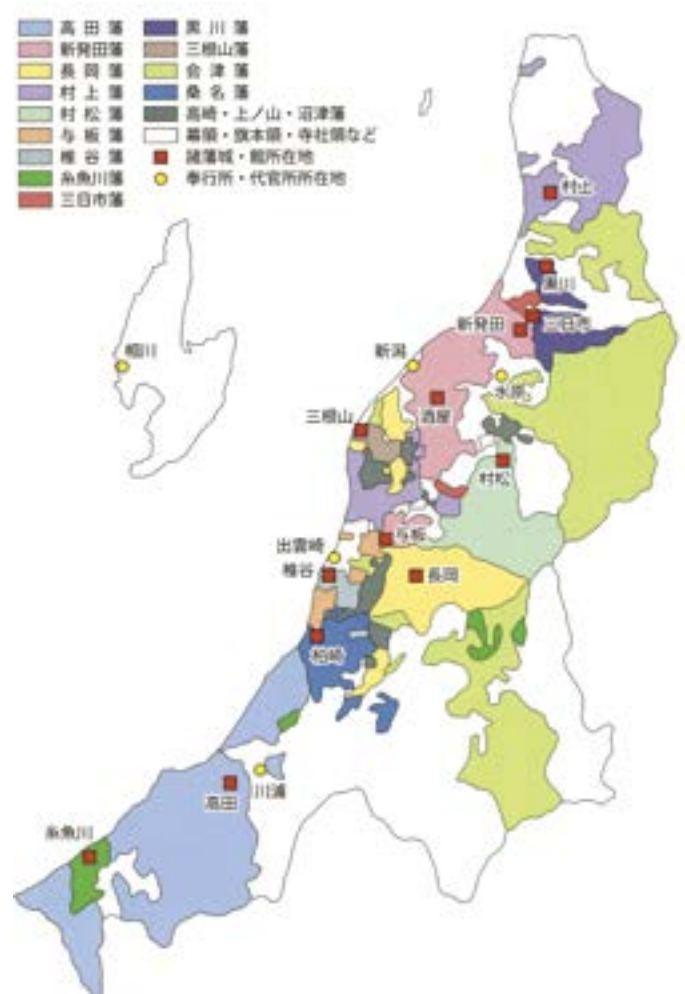
さて、「藩」あるいは「藩領」というとどんなイメージをお持ちだろうか。大名が居住し、藩政を執行する城があり、城の周りに家臣の屋敷、さらに町人の暮らす城下町があり、その周囲にひろがる広大な農地に農村や在郷町があり、街道をゆくと藩境の番所を抜けて隣の藩領に入る。城下町を中心に広い藩領がまとまってある。殿様は江戸時代を通じて代々その土地を治めている。こんなイメージだが、実はこうした藩は多くない。

■ 越後の藩

私たちの越佐はどうか。佐渡は一国天領と言われて全部幕府領であったことはみなさんご存知であろう。越後にあった藩をいくつかご存知か。江戸時代が終わろうとするとき、越後に藩の中心があった藩は、北から村上・黒川・新発田・三日月市・村松・三根山・与板・長岡・椎谷・高田・糸魚川。このうち三根山や黒川・三日月市・椎谷は、参勤交代はなく大名はいつも江戸にいた。城はなく陣屋しかもたない藩で

ある。

越後には代官所が統治する幕府領とこれらの藩の領地しかなかったかという点と違う。江戸時代を通じて東蒲原は小川（こかわ）庄とってて会津藩領だった。さらに幕末には会津藩は小川庄以外に越後に5万石の領地を持ち、小千谷や福岡・酒屋などに陣屋を置いていた。柏崎に桑名藩の陣屋があったと知っている人もいるだろう。越後に桑名藩領があっ



幕末越後佐渡の藩領の分布（『越後の大名』から）

たから陣屋があった。だから戊辰戦争の時に、会津藩や桑名藩は越後で戦争をした。蒲原には高崎藩領もある。

江戸時代のはじめには領地は比較的まとまっていた。もともと越後は慶長3(1598)年から堀秀治(ひではる)が、慶長15(1610)年からは松平忠輝(ただてる)とその付大名の溝口氏・村上氏が越後一国を統治していた。しかし元和2(1616)年に忠輝が改易になると幕府領が設けられ、牧野氏や酒井氏、堀氏などが越後に入部する。それでも越後の南半分は高田藩であり、中央が長岡・与板・村松藩、北は新発田・村上藩となっていた。しかし、頻繁な大名の改易・移封・増知・減知・領地替えなどによって、諸藩の領地が生じた。

たとえば、越後桑名藩領の始まりは、寛保元(1741)年の高田藩主松平定賢(さだよし)の白河転封であった。白河の周囲では石高が足りなかったため、白河転封後も引き続き高田藩時代の領地の一部8万石余りを領地とし、その支配所として柏崎に陣屋を置いた。文政6(1823)年に松平氏は桑名へ転封し、越後の領地はほぼそのまま桑名藩領と

なった。高崎藩領の始まりも藩主の転封による。享保2(1717)年に村上藩主松平輝貞(てるさだ)が高崎へ戻った際に、越後の領地38か村を引き続き領有し、一ノ木戸に陣屋をおいた。

他国の藩の小さな飛地の領地というものもある。例えば五泉町は白河藩領であったが、文政6年に桑名藩領とはならず忍(現埼玉県)藩領となり、さらに天保元(1830)年には沼津(現静岡県)藩領に変わっている。逆に新発田藩や高田藩は陸奥(現福島県)に飛地の領地があった。こうした飛地は大名が幕府から加増された際に、領地高の端数合わせに幕府領の数か村が大名領となることによって生まれる。

これに大名分家の旗本知行所や幕府領が加わる。阿賀野市の水原周辺、往来沿いに村が連なっているが、幕末期の領分を見ると、西から猫山村・小里村は新発田藩だが、安野川を渡った山口村は山口知行所領、下条村は幕府領水原代官所支配、水原村は西組が池ノ端知行所領、中組は幕府領水原代官所支配、東組は切梅知行所領、中島村は幕府領水原代官所支配、外城村は新発田藩領と入り組んでいる。越後各地に、隣り村は領主が違うとか、もともと一村なの



水原付近の村々(2万5千分1地形図部分 明治44年測図昭和6年修正)

に領主違いで村が分かれるとか、という領地の入り組んだ地域があったのである。

■ 三方領地替えの失敗

「鉢植え大名」という言葉をお聞きになったことがあるだろうか。幕府は鉢植えのように大名を動かすことができるということである。つまり、全国の領地は將軍のもので、大名は將軍から領地を預かっている。だから幕府は大名を取り潰す（改易）、移す（転封・移封）、領地を取り上げる（上知・上地）ことができる。これが幕藩制の根幹となる幕府と藩の関係であった。ところが江戸時代も終わろうとするころには、これができなくなる。いや、できなくなるから江戸時代は終わる。

天保11（1840）年11月、幕府は三方領地替えを命ずる。長岡藩主牧野忠雅（ただまさ）を川越へ、川越藩主松平齊典（なりつね）を庄内へ、庄内藩主酒井忠器（ただかた）を長岡へ転封するという命令である。この転封の理由については、幕府の権威を確認するためとも、財政窮乏に苦しむ松平齊典を救うためとも、幕府が海防政策を進めるために酒田・新潟を幕府領にするための段取りともいわれている。諸説ある。

さて、これに長岡藩はどう対応したか。勿論、嫌だとは言えず、支配を引き継ぐための書類づくりや、新しい領地の調査などを始めたが、内々に延期や新潟の領地継続などを幕府に願い出ている。転封というのは藩主だけでなくその家臣たちも移る。藩士たちは受け入れるしかなく、引っ越しの準備に取り掛か

り、道具などを売り払った者もいたと伝えられている。

一方、そのまま土地に残る領民の側からみると、転封によって領地を統治する藩の組織がまるまる替り、領民は新しい藩の支配を受けるということになる。領主が替わって年貢がどうなるのか。法律は厳しいのか。長岡藩に貸していたお金は返済されるのか。引っ越し費用を負担させられるのか。不安が募る。長岡藩領の各組を預かる割元は、反対運動を起そうかと藩に提案して断られている。それでも曾根組では代表を江戸へ派遣して大奥などへ内々の働きかけをしている。

領民の心配は庄内藩ではもっと深刻だった。酒井氏による藩政改革が成果をあげてきたところであり、川越藩主の評判は悪かった。藩をあげて反対運動が始まり、幕府重臣たちへ籠訴を行った。藩では領民が集会を開き氣勢をあげた。さらに仙台藩など近隣の藩へ訴えた。訴えを受けた各藩は幕府の転封へ疑問の声を上げ、領地替えを命じた老中水野忠邦への批判が幕府内部でも生まれ、翌年7月に將軍家慶によって三方領地替えの命令は撤回された。

初めて幕府が命じた転封や上知が実行できないという事態になったのである。この後、水野は天保改革のなかで幕府統治や海防のために藩の領地を幕領とする上知を試みる。しかし、成功したのは新潟上知だけで、江戸や大坂の周囲の上知などは大名の反対にあって失敗した。幕藩制の根幹が揺らぎ始めていることを世間に知らしめる事件であった。

（参考文献：『越後の大名』新潟県立歴史博物館・『新潟県史』・『新潟市史』・『長岡市史』・『角川日本地名大辞典』15新潟県）